



Data

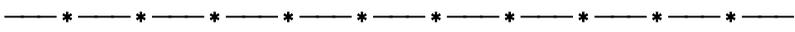
監督: 王小帥 (ワン・シャオシュアイ)

出演: 王景春 (ワン・ジンチュン)
 / 詠梅 (ヨン・メイ) / 齊溪 (チー・シー) / 王源 (ワン・ユエン) / 杜江 (ドゥー・ジャン) / 艾麗婭 (アイ・リーヤー) / 徐程 (シュー・チョン)

👁️👁️ みどころ

中国では、1967年から始まった文化大革命の10年間も大変だったが、1980年代の改革開放政策の中で始まった「一人っ子政策」も大変。幼い一人息子を水難事故で失った両親は、2人目の出産を無理やり阻止されたから、その悲しみは倍増することに。彼らのその後の人生は・・・？

原題の『地久天長』とは、友情と愛情の久しきこと天地の如し。2組の夫婦を軸に描かれる壮大な叙事詩は必見。その大団円の喜びを、共に味わいたい。



■政府の方針は絶対！だから「一人っ子政策」も絶対！■

1949年の「新中国」建国後、「貧乏人の子たくさん」とはよく言ったもので、人口増大のスピードはものすごいものだった。このまま放置しておけば次々と人口が増え続け、食料、住宅、衣服、教育、等々あらゆる分野で経済的に成り立たないことが明らかになっていく状況下、共産党一党独裁体制ならでは、ものすごい「政策」が実行（強行）された。それが「一人っ子政策」で、これは、1979年から2015年まで実施された。中国共産党一党独裁体制の中国では、政府の方針は絶対だから、中国人民が「一人っ子政策」を守ることも絶対だ。

本作は、1980年代初期の同じ日に生まれた2人の男の子・劉星（リウ・シン）と沈浩（シェン・ハオ）を義兄弟とした、劉星の両親である劉耀軍（リウ・ヤオジュン）（王景春（ワン・ジンチュン））と王麗雲（ワン・リーユン）（詠梅（ヨン・メイ））夫妻、そして沈浩の両親である沈英明（シェン・インミン）（徐程（シュー・チョン））と李海燕（リー・ハイエン）（艾麗婭（アイ・リーヤー））夫妻という2つの家族の物語だ。

毛沢東が指導して1967年から始まった文化大革命は1978年に終焉した。その後、鄧小平の指導下で始まったのが、1980年代の改革開放政策だが、その中でなぜ「一人

っ子政策」が採用されたの？本作では、その「一人っ子政策」を巡る中国の30年史がヤオジュンとリーユン夫妻を軸として描かれていくので、それをしっかり確認したい。

■□■原題の『地久天長』とは？■□■

本作のパンフレットには藤井省三氏（名古屋外国語大学教授、東大名誉教授）のコラム「友情と愛情の久しき事天地の如く」があるが、そのサブタイトルは、『在りし日の歌』が描く改革・開放と一人っ子政策の30年史」とされている。そして、本文中では、『在りし日の歌（中国語原題：地久天長）』は現代中国の“天地”と改革・開放30年の“長久”の歴史を舞台に、方々上昇し方や没落する2組の夫婦およびその5人の子供たちの喪失と成熟を描く長篇映画である。」と書かれている。本作の原題『地久天長』の「地」と「天」は文字通り「天と地」のこと。そして「久」と「長」は「長く久しい」という意味だから、この中国語を的確に日本語に翻訳すれば、上記のようになるわけだ。

本作は、冒頭に登場する子供時代のリウ・シンとシェン・ハオが遊んでいる中、ある事故でシンが死亡してしまうところからスタートする。そして、そこから2010年頃までの約30年間の「友情と愛情の久しきこと天地の如し」が描かれる。そのため、本作の邦題は『在りし日の歌』だが、原題は『地久天長』とされているわけだ。もともと、本作は3時間5分の長尺であるうえ、王小帥（ワン・シャオシュエイ）監督はあえて時間軸をごちゃ混ぜにしているし、近時の邦画のような説明調ではないから、現代中国の歴史を全く知らない人にはわかりづらいかもしれない。

中国共産党は去る2020年5月22日に、コロナ騒動のため延期していた第13期全国人民代表大会第3回会議を開催した。その議事内容を見ると、今や米中の新冷戦時代に突入した感が強いが、そのわずか30年前の中国は、本作のようなものだったのだから、その変化のスピードには驚くばかりだ。

■□■第2のシンシンが登場、それはなぜ？■□■

導入部のストーリーは1894年のものだが、それに続いて描かれるのは、それから数年後の姿。ここでは、今や16歳になったシンの反抗期真っ盛りの姿が描かれる。アレレ、ヤオジュンとリーユンの一人息子のシンは、1894年の子供の時に幼なじみのハオと遊んでいるときに川に溺れて死んでしまったのでは？確かにその通り。ここに登場する16歳のシンはリウ・ヤオジュンとワン・リーユン夫妻の養子で、死んだ息子と同じくシンと名付けた男の子だ。

このシンが同級生のウォークマンを盗んだと聞いた父親のヤオジュンが厳しく説教したのは当然だが、反抗期真っ盛りのシンは「こんなところ嫌いだ！奴らもあんたたちも」「悪かったなこんな子で」と言い残して家出してしまうことに。そんな事態の中、ヤオジュンは「あんな子は、死んだと思え」、「以ていてもしょせんは別人。シンシンは死んだんだ」と言ってリーユンを慰めていたが・・・。

■□■ 2人目を妊娠、しかしその出産はととても・・・■□■

シンが死亡した後、ヤオジュンとリーユン夫妻が養子シンを迎えた事情は、それに続くシークエンスで描かれるので、それに注目。それは1896年のことだ。

1896年のある日、リーユンは第二子の妊娠に気づいたから大喜び。しかし、運悪く、時は「一人っ子政策」が始まって間もない時だ。妊娠を夫婦の間だけの秘密にしていたものの、それが工場の副主任で、計画生育のトップを務めているハイイエンにバレってしまったから大変。ハイイエンの命令によって強制的に病院に連れていかれて堕胎させられたリーユンは、二度と子供を産めない身体になってしまうことに。そんな失意の中で、スクリーン上には、ヤオジュンとリーユン夫妻が計画生育における優秀賞として表彰されるシークエンスが登場する。そこで当然ヤオジュンとリーユン夫妻は、笑みの中で表彰状を受賞し、笑みの中で記念撮影を強いられたから、皮肉なものだ。ちなみに、中国では2015年以降「一人っ子政策」は緩和・廃止されているから、そんな制度に翻弄されたリウ・ヤオジュンとワン・リーユン夫妻の悔しさは如何ばかり・・・。

■□■ 西欧流のダンスやファッションは？改革開放の嵐は？■□■

日本では戦後15年を経た1960年代から昭和の高度経済成長時代が訪れるとともに、映画界には戦後を代表する大スター・石原裕次郎が登場し、若者ファッションが花開いた。それと同じように、中国でも鄧小平の指導による改革開放政策が始まる中で、西欧流のダンスやファッションにハマってしまう若者が続出したらしい。

本作では、その代表として、ヤオジュンと同じ工場に勤めるシンジエン（趙燕國彰（チャオ・イエングオジャン））や、ヤオジュンに想いを寄せる女性・メイユー（李菁菁（リー・ジンジン））が登場する。改革開放政策が始まる中、西欧流の音楽やダンス、そしてファッションが次々と入り込んできたのは仕方ない。本作では、それをシンジエンやメイユーが大音量で流すカセットテープの音楽に乗って踊るシークエンス等で演出しているので、それにも注目。

私が大学時代を過ごした1960年代後半には、「ダンパ」と呼ばれていた「ダンスパーティ」に出かけて行き、そこで女の子を引っかける、今ドキの言葉では「ナンパする」ことに精を出す友人がいたが、何でも自由な日本では、当然それもあり。しかし、いくら改革開放政策を進めているとはいえ、中国では「ダンスパーティ」は風紀を乱すという理由で、シンジエンの逮捕という大変な事態になることに。

■□■ 不倫・浮気は中国にも？こりゃ、かなり深刻だが・・・■□■

他方、本作中盤ではインミンの妹で、ヤオジュンを兄のように慕う女性・沈茉莉（シェン・モーリー）（齊溪（チー・シー））が登場し、あの当時の中国人民には珍しいヤオジュンの浮気・不倫の相手として大きな役割を果たすのでそれに注目！

モーリーが出張で福建省を訪れた際、ヤオジュンが妻のリーユンに「仕入れに行く。」と

嘘を吐いてまで、モーリーの宿泊するホテルにやってきたのは一体なぜ？数年ぶりの再会、と昔話に花を咲かせる二人は楽しそうだが、そこでモーリーが「近々アメリカに行く」という話を持ち出すと、必然的に（？）二人の雰囲気は急接近。ベッドインまで果たしてしまっただけからアレレ・・・。

この浮気・不倫はさらに深刻。それは、一度の過ちでモーリーが妊娠してしまったうえ、一人息子を失ったヤオジュンのために、「子供を産んであげる」、とまで熱を上げてきたためだ。本作では、あの時代に「アレレ、そこまで大胆な・・・」と思うようなストーリーが展開していくので、それにも注目したい。そこまで女から言われた男なら誰だって・・・？そんな気がしないでもないが、さて本作で見せるヤオジュンの対応は？

いくら共産党一党独裁の国でも、不倫・浮気が発生するのは仕方ない。しかし、本作でみせるヤオジュンの対応は、いかにも中国流・・・？そして、中国共産党流・・・？

■□■ シンシンの死亡原因は？しかし今更・・・ ■□■

私は2021年1月に72歳を迎えるから、大学を卒業した22歳の時から既に50年が経過したことになる。それに比べれば、本作が「地久天長」として描く物語は30年間だが、その30年間は中国が大きく激動した時代。したがって、ヤオジュンとリーユン夫妻もインミンとハイエン夫妻も大変だ。

しかして、2011年の今は立派な医者になったハオが、母・ハイエンの脳のレントゲンを見ながら、「もはや手術もできない状態だ。」とハイエンに告げるシーンが登場する。そんな状況下、「死ぬ前にもう一度会いたい。ふたりを思わない日はなかった。」と訴えるハイエンの要望に沿って実現したのが、ヤオジュンとリーユン夫妻の故郷への帰還だ。病院で約20年ぶりになる涙の再会を果たしたヤオジュンとリーユン夫妻に対してハイエンは、「私たちはお金持ちになった。だから大丈夫、あなたも子どもを産んでいいの」と声を絞り出したが、今更そんなことを言われても・・・？

さらに、ハイエンの葬儀を終えたハオは、意を決して長年心の中に秘めていた話を意を決してヤオジュンとリーユン夫妻に告白した。それが、シンシンの死亡原因だが、しかしこれも今更・・・？本作ではさらに、ハオの告白を聞いたインミンがヤオジュンのもとを訪れ、「せがれを殺してくれ」と訴えるシークエンスが登場するので、それに注目。もちろん、これも今更・・・？

■□■ 世代交代は順調に！大団円に拍手！ ■□■

織田信長は教盛の「人間50年」を愛し、その歌のとおり、50歳直前に明智光秀の謀反によって死亡した。その後、織田から豊臣、そして徳川へと順調に世代交代（？）が進んでいった。それと同じように、本作ラストでは、ハオに待望の赤ちゃんが生まれ、世代交代が順調に進む姿が描かれる。

そこで、甥のサニーを見せて欲しいというインミンの言葉で画面上に現れたのは、モー

リーの元夫のアメリカ人男性が父と思われるハーフの男の子。さらに、導入部では反抗期の真っ盛りで父親に悪態をついて家出した養子のシンも福建省のヤオジュンとリーユン妻の家に恋人を連れて帰ってきたから、万々歳。あと数年もすれば、シンも恋人と結婚して赤ちゃんを産み、世代交代が順調に進むだろう。

本作では第69回ベルリン国際映画祭で最優秀男優賞と最優秀女優賞をダブル受賞したヤオジュンとリーユン夫妻と、インミンとハイイエン夫妻を軸とした中国の近代30年史の大変さが描かれる。また、それと同時に、シンジエンと一緒に広東省に行ったメイユーや、さらに、夫と離婚して単身アメリカに向かったモーリーも、ヤオジュンとリーユン夫妻と同じ30年間において、それぞれ大変な人生を歩んだことが描かれる。本作はそんな3時間5分の長尺だが、『地久天长』という原題どおり、多くの登場人物の人生模様がぎっしり詰め込まれているので、それをしっかり観察し、味わいたい。

2020（令和2）年6月10日記